



| | |
|------------------------|---|
| Title | 体育授業における教師の関与と生徒の集団内での言語的コミュニケーション：可視化データによる実証的・実践的研究 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 中島, 寿宏 |
| Citation | 北海道大学. 博士(教育学) 甲第14855号 |
| Issue Date | 2022-03-24 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/85233 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Toshihiro_Nakajima_abstract.pdf (論文内容の要旨) |



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名： 中 島 寿 宏

学位論文題名

体育授業における教師の関与と生徒の集団内での言語的コミュニケーション
ー可視化データによる実証的・実践的研究ー

本論文では、これまでの体育授業研究での課題として残されている生徒のかかわり合いを学習そのものとして捉え、かかわり合いを客観的データに基づいた体育授業分析および体育授業の改善に向けた取組を試みる。特に、体育授業内での教師の関与が生徒相互の言語的コミュニケーションに与える影響について量的・質的データから明らかにすることを目的とした。

本論文は、序論、第1部（文献研究 第1章～第2章）、第2部（横断研究・縦断研究による実態調査 第3章～第6章）、第3部（介入研究による実践調査 第7章～第10章）、第4部（総括 第11章）で構成された。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、我が国の戦後から現在まで続く体育授業での児童生徒の集団と教師の関与との関係性の研究について歴史的変遷を概観した。これまでの体育授業研究では、児童生徒の集団内のコミュニケーションの繋がりやネットワークがどのように行われているかについて、具体的なデータに基づいた検証が不十分である点について指摘した。特に、体育授業においては言語的コミュニケーションが集団の学習を捉える上で重要な機能を果たしており、児童生徒が集団として言語的にどのように他者と相互的なかかわりを持っているのか、教師が関与することで集団の言語的な繋がりがどのように変容するかについての議論が不可欠であることを論じた。

第2章では、体育授業における児童生徒の学習状況と教師の関与との関連性について、客観的データによって可視化され、具体的な事象として検証されることで、実際の体育授業における集団の学習状況・学習過程を明らかにすることが可能であることを指摘し、本研究の目的を述べた。また、本論文で実施される一連の調査において、言語的コミュニケーションを量的に測定する機器についての解説を示した。

第3章（研究1）では、中学校のダンス授業を対象として、言語的コミュニケーションの量的調査から可視化データとして測定・分析することで、グループ活動内の言語的コミュニケーションがどのような様相を示すのかを検証した。その結果、グループ内での生徒同士の関わり合いには学習の状態に合わせて4つの異なるフェーズが存在することが示唆された。

第 4 章（研究 2）では、中学校体育の器械運動と球技の授業を対象として、グループ内の言語的コミュニケーションの状態を調査した。また、教師によるグループの活動内容や課題意識への見取りと言語的コミュニケーションの確認を行なった。その結果として、ダンス以外の体育授業においても生徒同士の話し合いの状態には異なるフェーズが存在することが確認された。

第 5 章（研究 3）では、中学校体育の球技の授業を対象として、単元内での生徒たちの言語的コミュニケーションの量や状態について検証を行った。その結果、生徒たちの言語的コミュニケーションの量と状態は学習の状況によって単元内で変容していることが明らかとなった。

第 6 章では、第 5 章までの研究結果を総括し、中学校の体育授業では学習の状況に 4 つの言語的コミュニケーションについてのフェーズが存在することを示すとともに、生徒相互の課題共有の状態によって、生徒たちのグループの学習状況は 4 つのフェーズを移り変わることを論じた。

第 7 章（研究 4）では、教育実習生と熟練教師の中学校体育授業について、関与の仕方の違いが生徒たちの言語的コミュニケーションにどのような違いを及ぼすかについて、球技の授業を対象として実験的授業を実施し、質的・量的データの両面からの違いを検討した。熟練教師の授業では、生徒たちが課題解決に向かう話し合いを活発にしている様子が確認され、熟練体育教師は生徒たちの主体的な授業参加姿勢を引き出すための関与の仕方を行っていることを示した。

第 8 章（研究 5）では、中学校での熟練教師と若手教師の体育授業を量的・質的に比較することで、体育授業における教師の関与と生徒の学習との関連について検討した。熟練教師は発問や問いかけといった生徒への関与の仕方が多く、生徒の学習での課題意識を引き出そうと工夫していることが確認された。また、熟練教師の関与の仕方の工夫によって、生徒が授業目標の達成に向かうようになることが、教師の発話内容、生徒の言語的コミュニケーション量、身体活動量、学習カード記述内容といった各種の学習状況を示す量的・質的なデータを総合することで明らかになり、言語的コミュニケーションのネットワーク図にも表れていることを論じた。

第 9 章（研究 6）では、中学校体育授業の創作ダンスの授業を対象として、生徒の言語的コミュニケーションの状態を授業カンファレンス時に可視化データとして教師にフィードバックすることで、教師の授業の振り返りや以後の授業に変化が表れるかを検討した。教師は可視化データによって自身の授業を振り返ることが可能であり、カンファレンス後の授業に対する具体的な改善方法についても検討するようになったことを示した。特に、教師は生徒同士のやりとりについても気づきを得ることで、グループ内の対話を引き出すような声かけについて意識を向けるようになったことを示した。

第 10 章（研究 7）では、中学校でのチーム・ティーチングによる体育授業を対象として、生徒同士の言語的コミュニケーション状態を可視化して教師にフィードバックするこ

とで、教師同士の連携や協力関係についての問題・課題の把握や、授業改善に向けた課題意識の共有化や役割分担などに効果が表れるかを検討した。今回の事例では、授業カンファレンスにおいてコミュニケーション状態についての可視化データをフィードバックすることで、教師の気づきや教師相互の共通認識の深まりに繋がったことを論じた。

第 11 章では、研究全体の総括を行った。各章の内容を要約するとともに、中学校における体育授業での教師の関与と生徒の集団内での言語的コミュニケーションの関連性について理論的展望を論じ、本論文の限界と課題について述べた。

本論文の成果として示されたことは以下の 3 点である。

1 点目として、中学校での体育授業におけるグループでの話し合いを中心とする学習活動では、生徒たちの言語的コミュニケーションは課題意識を共有する状態によって異なるフェーズを行き来しながら課題解決に向かうことを示した。

2 点目として、教師の生徒たちの話し合いの活動への関与の仕方では、直接的・具体的・個別的な指導や指示よりも、発問や問いかけといった思考や発言を促す関与が生徒間の言語的コミュニケーションのフェーズを高める効果があることを示した。

3 点目として、教師は生徒たちの言語的コミュニケーションについての可視化データのフィードバックにより、生徒たちの学習に向かっている状態をより把握することができ、その結果として自身の関与の仕方を修正することで授業改善の実現が期待できることを示した。

本論文の課題として、対象となる授業領域・授業内容・児童生徒を広げた検討と、質的データや非言語的コミュニケーション指標を用いたアプローチによる検討の必要性が挙げられた。